

プロジェクト K

vol.30

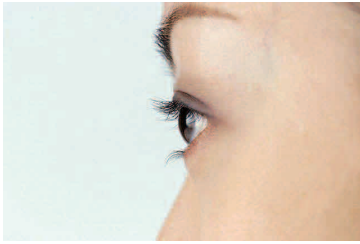
文責：荒木 秀夫
(徳島大学大学院教授)

「視覚頼み」

「感覚運動統合は、抹消的な目、耳や皮膚に関係する段階から、脊髄、脳幹さらには脳の高次な活動など、あらゆる段階でも見ることができるといったことが前号の結びでした。

今回は、まず視覚の例から話を進めてみたいと思います。

軽いチョークが2本あって、微妙に長さが違うとします。当然、重さも異なるわけですが、見れば長さが違うと判断できても、手で持って重さを比べると判断は難しいことがわかるでしょう。なぜこのような視覚と



問合せ先／スポーツ推進課プロジェクトK・スポーツ推進係
☎57・4850

重さの感覚に違いがあるのかというと、人間の感覚は「視覚頼み」だということが主な理由です。動物は、種によって感覚の得意、不得意がありますが、人間は、視覚が得意でも嗅覚は不得意です。環境に適應する中で進化しながら視覚を発達させてきたものと考えられます。

重要な能力の例で考えてみましょう。昆虫や魚は頭の反対側に目があります。視野が広そうで便利なようにも思えますね。しかし、動物は進化するために、次第に前の方へ、つまり「顔」の中央に目を据えて、両目で前を向くようになります。そのかわり視野はどうしても狭くなります。それでもなぜ中央に目を寄せたのかというと、「立体視」を可能にするというのがその理由です。つまり「奥行感」を得るわけですね。

一方で、視野が狭くなるという問題をどう解決するかですが、ここで運動が大いに関係してくるわけです。運動が関係するということは、単に視野が狭くなったことを補うだけではありません。ここに「感覚統合」という意味で重要な仕組みが存在しています。

そこで、視野の確保と運動との関係から、まずは触れることにしましょう。



乳児シリーズ vol.1

赤ちゃんは天才

本号から、一年間のシリーズとして、新生児、乳児についての育ちの問題、能力の問題、心と体の発達、社会性につながる人との交わりなど、とにかく“赤ちゃんもの”を取り上げることとなりました。今回が初回ということになりますので、まずは、大ざっぱに赤ちゃんとは何かといった感じで話を進めていくことにします。

“赤ちゃんは天才”ということが、よく言われます。言葉は喋れなくても、直観的に何かを覚えたり、理解したり、とくに大人が学ぶのにさんざん苦労するにもかかわらず、子どもは、いとも簡単に学びとってしまうことなどから言われたことです。どちらかと言えば、“子どもは天才”が普通で、時たま“赤ちゃんは天才”も使われるということが実際のところでしょう。

要するに乳幼児は、何においても学習が速い、覚えるのが速いということであって、それは、だれもが感じていることではあります。確かに子どもにしても、赤ちゃんにしても、天才にはまちがいが無いのですが、日常生

活で、目に見えるところで、大人が感じていた「天才ぶり」が、最近のいろいろな脳科学や人間の科学において、目に見えないところでも、想像していた以上に「天才である」ことがわかってきました。

もちろん科学研究においては、限定された条件での研究であって、一般的なことに結びつくかどうかはいろいろ議論があるところでしょう。

こうした知見も含めて、このシリーズではコーディネーション能力を引き出すことを目的とした“プロジェクトK”で、私が紹介してきた0才児プログラムなどとの関わりから、いくつかのテーマを今後、紹介していくことにします。

